

自助天助

嶋田麻紀

類想類似を避けるには、どうすればよいのだろうか？
 たまたま、片山由美子さんの『鳥のように風のよう
 に』を読んでいたら、「類句について」と題する文章が
 あったので、そこにある句を例に、少し考えてみたい。

春潮を家の畳に立ち眺む 誓子

春の潮畳に立つて見てゐたり 省二

岡井省二氏は、山口誓子の句が先にあるとの指摘を受
 けて、ご自分の句を抹消されたという。どこにある畳か
 を考えれば、反論の余地もあらうが、潔いことである。

岡井氏は、ご自分の句を抹消されたくらいだから、も
 し誓子の句をご存知であれば、この句をお作りにならな
 かったはずである。従って、類想類似を避ける一番の方
 法は、先行作品を知っておくことである。

しかし、そうは言っても、すべての先行作品を知って
 おくのは、実際には不可能なことである。俳句は、あま

りにも数が多過ぎるからである。わが麻俳句会が誇る松
 浦敬親編集長の言葉を借りれば、「そんなことを言っ
 たら、一句も作らない内に一生が終わってしまいます
 よ」ということになる。

それでは、道はないのだろうか？ もちろん、ある。
 個人の力では不可能でも、みんなならできからであ
 る。つまり、恐れずにどんどん作り、後は岡井氏がさ
 れたように、指摘があれば抹消すればよいのである。

ところで、次の句ならどうだろうか？

黒潮を秋の畳に立つて見る

おそらく、先程の誓子の句を知っている人なら、この
 句でも、類想類似の指摘をするだろう。季節が違っ
 て、潮と畳の取合せが同じだからである。

それでは、次の句はどうだろうか？

黒潮に秋の畳が乗って行く

同じ潮と畳の句でも、ここまで来ると、類想類似から
 かなり遠い。誓子の先程の句を知っていても、それを指
 摘する人は、まずいないだろう。

それでは、次の句ならどうだろうか？

初潮を夜の岩鼻に立つて見る

こうなると、類想類似を指摘する人が、また出てくる
 かもしれない。季節と場所が違っても、潮をどこかに立
 って見るのは、誓子の先程の句と、同じだからである。

しかし、誓子の句とこの句とでは、句の内容（作者の
 言いたいこと）が、かなり違う。誓子の句は、春潮の激
 しさを、安全な家の畳に立って眺めているが、こちらの
 句は、初潮の激しさを、危険な夜の岩鼻に立って見てい
 るからである。だから、この句をも類想類似に入れるか
 は、類想類似をどう定義するかによる。

それでは、次の句はどうだろうか？

ぶらんこのうしろに満つる潮かな

これならば、先程の誓子の句を知っていても、類想類
 似だと言う人は、まずいないだろう。共通点は季節と潮
 だが、内容的に大いに違うからである。

ところが、松浦敬親氏に言わせると、どちらも海の物
 と山の物との取合せで、見方によっては共通点が出てく
 るという。なるほど、と思う。

実は、以上の句はすべて、誓子の先程の句を出発点に
 して、どのくらい離れると類想類似と言えなくなるかを
 知るために、敬親氏に作っていただいたものである。

春潮を家の畳に立ち眺む

黒潮を秋の畳に立つて見る

黒潮に秋の畳が乗って行く

初潮を夜の岩鼻に立つて見る

ぶらんこのうしろに満つる潮かな

こうして並べると、類想類似を避けるコツのようなも
 のが、少しは見えてくるかもしれない。敬親氏によれ
 ば、そのコツは、取合せの時空（時間と空間）に焦点を
 しぼって、そのどちらか、あるいは両方を、飛躍させる
 ことにあるという。後は、その才能の問題。

もちろん、敬親氏のこれらの句にもまた、類想類似の
 句が見つかるであろう。その時は、岡井氏がしたよう
 に、その句を抹消すればよいのである。そうやって試行
 錯誤を繰り返しているうちに、きっと天が助けてくれ
 る。そう信じて「志」を高く持ち、お互いに努力するし
 かない。